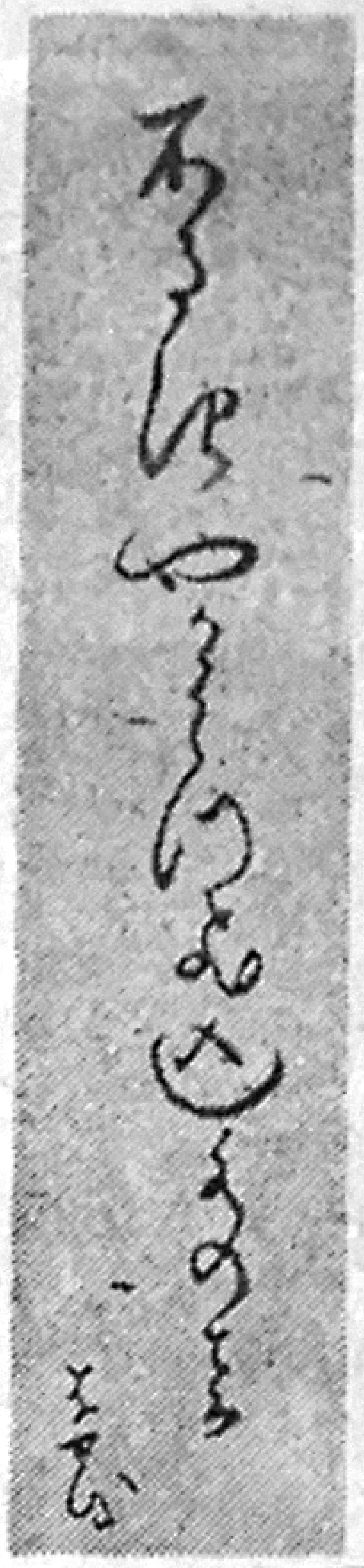


俳句の卷

第一講

加藤霞村氏

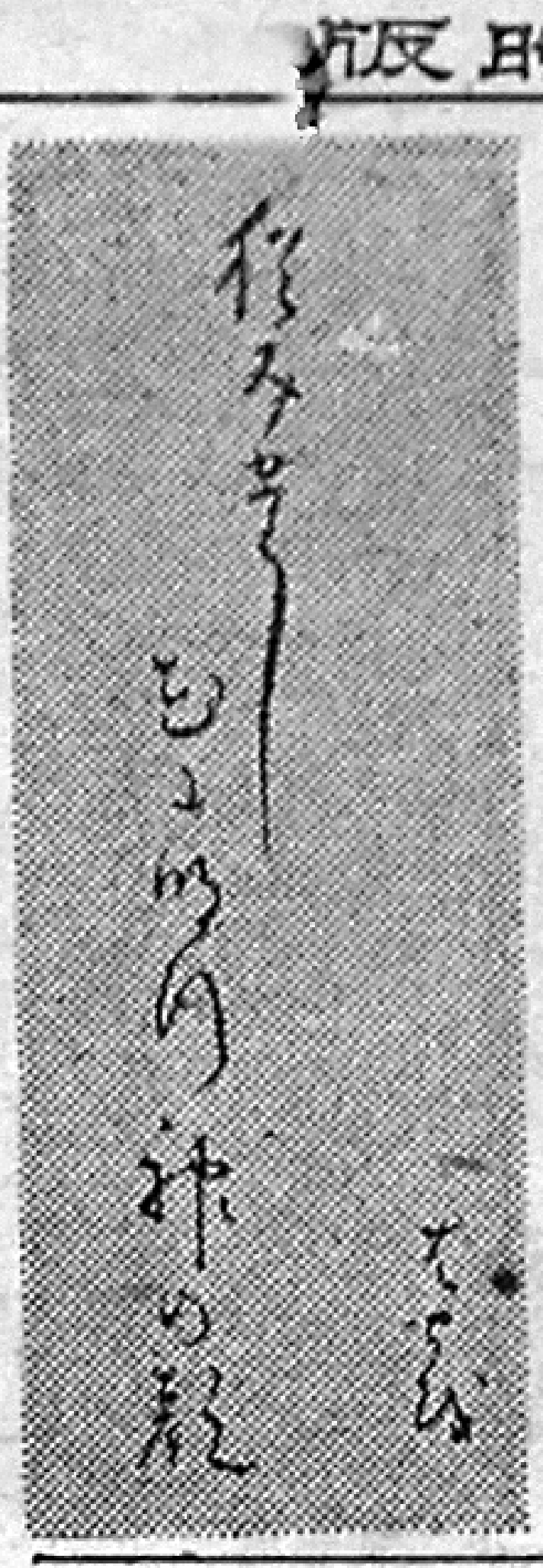
【下】

前回に俳句の上達には指導者の意見を一應そのまゝ容れることの必要を申し述べましたが、それでは適當な指導者が得られなかつたならば、俳句の勉强は全然出來ないかと申しますと、そんなものではありません。指導者の得られない場合でも俳句の勉强法はいくらでもあります。御承知の如く現在では專門の俳句雜誌も發行されてゐますから、その中から自分の最も好むもの、これなら正しいと信じ得るものを選擇し、その雜誌に缺かさず投句するといふやうにすればその投句者の心掛け如何によつては直接指導に劣らない效果を擧げ得るのであります。すなはち雜詠入選を目ざして、ひたすら精進を續けるのであります。落選すれば更に發奮し、入選すれば自然に自信を得て更に精進を續けるといつた結果になります。現在地方に在つて指導者に惠まれない多くの俳句作者達は事實かくの如くにして勉强を續けてゐます。但しこの場合投句をして自己の作品を選擇してくれるからといつた甘へ心に依存することなく、自己の最も正しいと信じた雜誌に向つて落選の憂を甘受しつゝ精進するだけの覺悟と勇猛心が何よりも望ましいのであります。

また大勢で出來る俳句の勉强法としての俳句會はお互に刺戟し合つたり、多少とも競爭心を起すことによつて大衆句作に役立つもので、初心のうちは何となく恥しいやうな氣がして出席を躊躇する人が多いやうですが、最初に少々勇氣を出して出席してみると案外面白くなつて遂には句會に出ることが一つの樂しみになつて來ます。句會に出て選句したり披講（入選句を讀み上げること）を聞いたりしてゐるうちに知らず識らず上達するものです。句會無用論を唱へてゐる人もありますが私は句會有用論者の一人で、句會は決して輕視すべきでなく大いに獎勵すべきものと考へてをります。また「吟行」も勿論句會と同樣、或はそれ以上に有用であると思ひます。

最後に俳句の最も簡單な勉强方法は何かと申しますと、それは結局多讀、多作に限ります。多讀といつても何でも無暗に多く讀めばよいといふのではなく心してよいものを讀むことは勿論です。（この項終り）

★寫眞說明＝芭蕉の句と上野市愛染院にある芭蕉古鄕塚、右の句は有名な「ふる池やかはづ飛込水の音」左の句は「猶みたし花に明行神の顔」とあり、芭蕉が、大和葛城山の麓を過ぎて花の盛りを見て吟ぜしものである。



入 案內

藝道のこゝろ

獨學上達の道

怠る勿れ必ず開く

小賣書店が廢業しても

配給はこんな方法で行ふ

讀者が困らぬやう

企業整備により小賣書店の整理が着々と進められてゐるが、買ひつけの書店が轉廢業した場合には定期雜誌や豫約全集物等いはゆる繼續出版物の取扱ひはどうなるであらうかと懸念してゐる人々が多いが、これに對して日本出版配給株式會社では次のやうな策をたてゝ讀者の不便と迷惑を防ぐこと、なつた、即ち

◇轉廢業小賣店はなるべく近所に引受小賣店を選んで讀者の地理的利便を圖るやうにする

◇引受を指定された小賣店は讀者にそれを通知し承認を得ることとし、轉廢小賣店は引受小賣店を店頭に掲示し讀者によく判るやうにする

◇轉廢小賣店は讀者から受取つてゐる前金は返金すること、し、それの出來ない場合、例へば豫約全集物の申込金受領分などについては讀者に對し一點一葉の證明書を渡し、讀者はこれを引受小賣店に示して配給を受ける

軍事講座

空襲と流言蜚語

神經戰の備へはよいか

敵は盲爆によつて戰意を挫かうとしてゐるので、神經戰に對する備へを常に嚴重にしてゐなければならない。特に空襲についての流言蜚語は最も愼しむべきものである。國家では治安維持の必要から、空襲時における流言蜚語の取締りを嚴重にしてゐるが、その主なる點を知つておかう

①被害を誇大して唱へるとか、食糧の配給がなくなるとか、貯金の拂戻しがなくなるとか、人心を惑はす目的で事實無根のことをいひふらした者は「刑法第一〇五條ノ二」以下により五年までの懲役、もしくは禁錮、または五千円までの罰金に處せられる。

②「再空襲があるから今のうちに買溜とか闇をやらなくては」とか「貯金を引出せ」とかのやうに經濟上の混亂を起す目的で流言をした場合は七年までの懲役、もしくは禁錮、または五千円の罰金に處せられる。

③國外または外國人としめしあはせ、または外國に利益を與へる目的で流言した者は國防保安法第九條により無期または一年以上の懲役である。

④軍事上のことに關して根も葉もないことをデマ報道する者は陸軍刑法第九九條、或は海軍刑法第一〇〇條によつて三年までの禁錮の刑に處せられる。

その他警察犯處罰令、取引所法、電信法、無線電信法、出版法、新聞紙法不穩文書臨時取締法等によつても流言蜚語は處罰される。

映畫物語

芝居道

【東寶作品】

明治二十七、八年戰役の頃のことである。大阪に大和屋榮吉、通稱を「大榮」と呼ぶ興行師があつた。彼は日淸戰爭に因んだ劇のみを上演して大當りをとつてゐたので同業者には〝時局便乘〟とまで惡口をいはれた。

「わては儲けよう思うて戰爭芝居をしてゐるのやおまへん。兵隊さんの御苦勞をお客さんに少しでも知つて戴かう思うて……」

榮吉の悩みはそればかりではなかつた。子飼ひの立役者で今賣出しの中村新藏が己の人氣を鼻にかけて心驕り、幼馴染の女義太夫竹本花龍と忌はしい噂をたてられるまでになつたことである。榮吉は心を鬼にして、花龍に新藏が藝道で大成するまで別れてくれと賴んだ。

花龍と別れた新藏は二人の心盡しも知らず一途に彼等を恨んで東京新富座の頭取守田善哉に買はれて行つた。そして嚴しい芝居道に第一歩から鍛へ直された。――それも實は榮吉のさし金であつた。

それから數年、新藏の懸命な努力は實を結び東京でも指折り數へられる名優と謳はれる迄になつてゐた。その頃大阪の榮吉は世間が戰勝に醉つてゐる時代には勝つて兜の緒をしめる劇を見せるべきだとの信念から忠臣劇のみを上演し小屋は不入りで經營も怪しいまでに落ちてゐた。善哉ははじめて新藏に榮吉の眞意を打明けた。新藏は師の溫き心を知り善哉の許しを得て大阪へ馳けつけた。

軈て大阪にも再び春が訪れた。

演出・成瀨巳喜男、大和屋榮吉…古川綠波、中村新藏…長谷川一夫、竹本花龍…山田五十鈴、守田善哉…伊井友三郎、榮吉の娘お絹…花井蘭子

けふの座右銘

父の誡めは皆我身の幸

小林一茶

一茶は子煩惱であつただけ、孝心も亦あつく、父の終焉に當つてその看護懇切を極めた。これはふとした事で父の怒にあひ「よべは父に長の別れと思ひしに今朝は父のせつかんにあふことのうれしさ云々」といふ淚ぐましい告白の中に洩らされた一句。子としてかくありたき謙虛な言葉である。終焉日記中にある。

【解說・塩田良平】

衞生手帖

脈搏は人によつて違ふが標準は一分間に△一歲＝一二〇－一三〇△二歲＝一〇〇－一二〇△三歲＝九五－一〇〇△六歲＝八五－九〇△十歲－二十歲＝七五－八〇△二十歲－五十歲＝六〇－七五△五十歲以上＝四〇－六〇といふ處、なほ脈搏は十增加すれば體溫が約一度上るのであるから體溫計のない場合には正確にはいかないが大体の体溫は知ることができる。

國史の窓

リーフデ號と三浦安針

★…西暦一五九八年、和蘭のロッテルダムから東洋に向つた一艦隊があつた。マヒューを司令官とし五隻の軍艦を率ゐてマジエラン海峽を過ぎて東洋を目ざしたのであるが、途中食糧は缺乏する、疫病は流行するといふ譯で、マヒューは病死し、これに代つたデ・コルデスはモカ島で殺される、おまけに暴風雨にはもてあそばれると、散散の体であつた。

★…この艦隊のうち殘つた一隻、リーフデ號が豐後に辿りついたのは慶長五年（西紀一六〇〇年）三月十六日のこと、かの天下分け目の關ケ原合戰に先立つ數ケ月以前に當る。

★…この時、生存者はわづかに二十四名、步行できるのは數名に過ぎなかつたといふが、この一行の中にあつたのが和蘭人の頭目であつたヤン・ヨーステンと日本名三浦安針で有名な英人水先案內者ウイリアム・アダムスである。

★…兩人共に家康に厚遇せられてヤン・ヨーステンは江戶八代洲河岸に、アダムスは同じく安針町に邸を貰つて幕府の外交顧問役となつたが、リーフデ號が艦尾につけてゐた哲學者エラスムスの像（リーフデ號の初名エラスムスに因んだ）は足利に現在も殘り、また帝室博物館にある三枚一組の海圖はアダムスが大阪で最初に家康と會見した時見せたものであらう――とは幸田成友博士の說。

談室

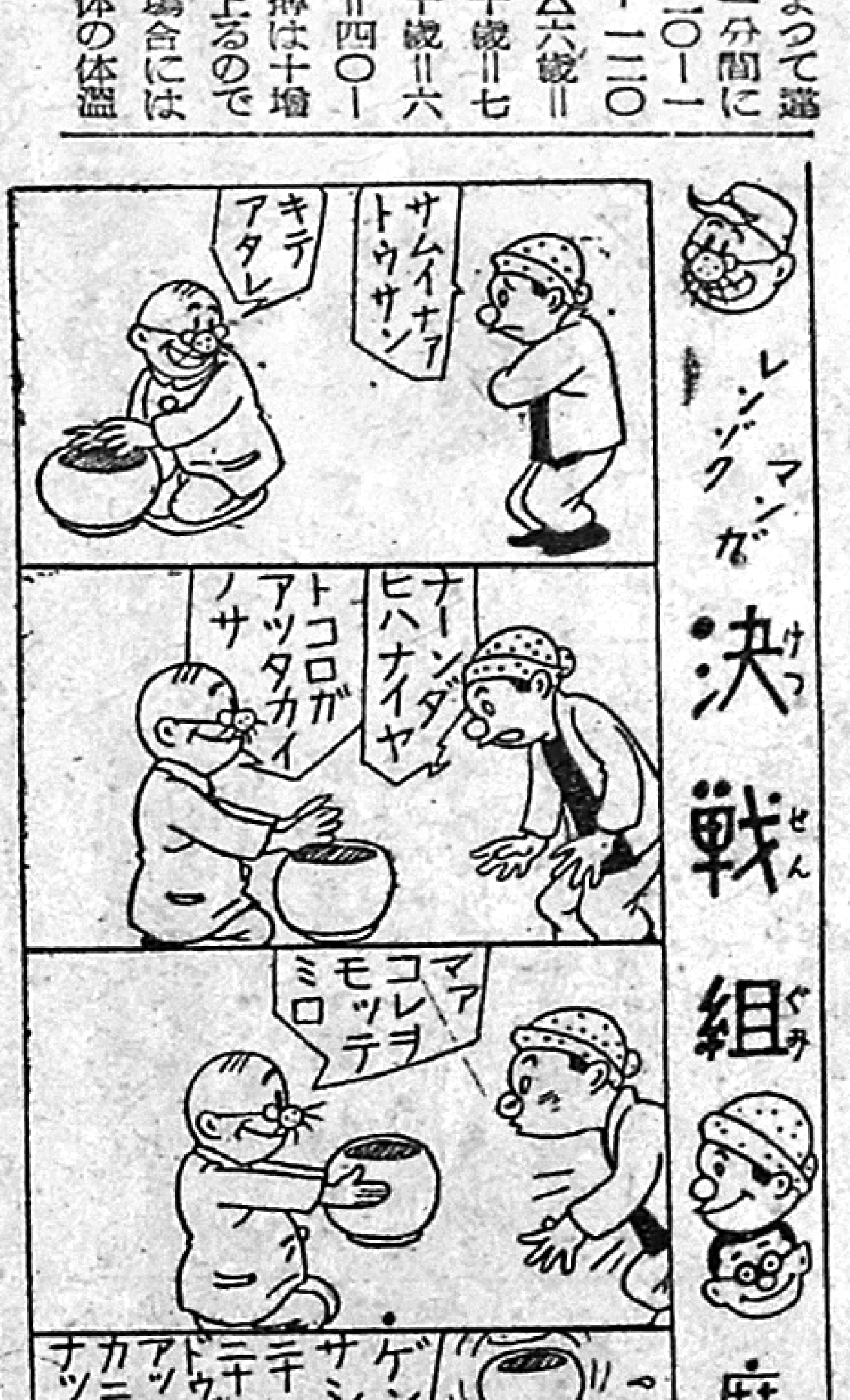
自信かくの如し

江戶時代初期の能書家はまづ近衞流の開祖三藐院近衞信尹に松花堂昭乘と、それに本阿彌光悅―これを三筆と呼んでゐます。中でも光悅は藝道行くところとして可ならざるはなしといつた能手ですが書道では光悅流の祖としてその自信もなみなみならぬものでした。ある時、三藐院が光悅と會つて、今の世の書道の第一は誰であらうといふと、光悅が、されば第二位はあなたで御座いませう、そして第三位は昭乘でせうか、と答へました。ならば第一位は、と問へば、光悅の曰く憚りながらかく申す手前で御座います。これはまことに自信たつぷりな挨拶、まかり間違へば、はた目も可笑しい自負心になつたり衒ひになつたりします。しかしなんといつても自分の仕事にこんな自信が持てたらと思ふことです。

決戰組

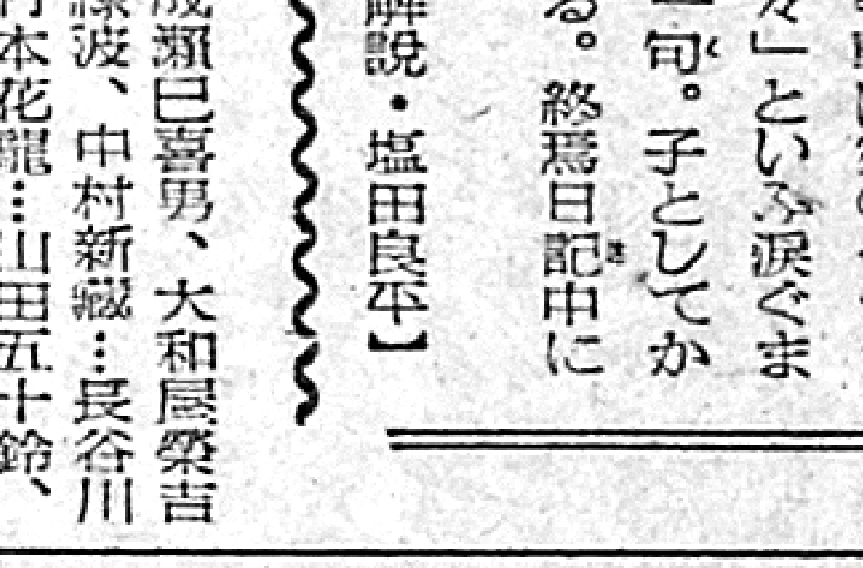
レンゾク マンガ

麻生、豊


サムイナア トウサン
キテ アタレ
ナーンダ ヒハナイヤ
トコロガ アッタカイ ノサ
マア コレヲ モッテ ミロ
ゲンキ
サシアゲテ
イチー ニー イチー ニー
ドウダ
アッタカニ ナッタロ

第二回 懸賞詰碁

出題 篠原正美六段



△解答はハガキに認めること△締切 三月十九日△送り先 名古屋市榮區御幸本町二丁目二四 中部日本新聞社編輯局戰時版整理部宛

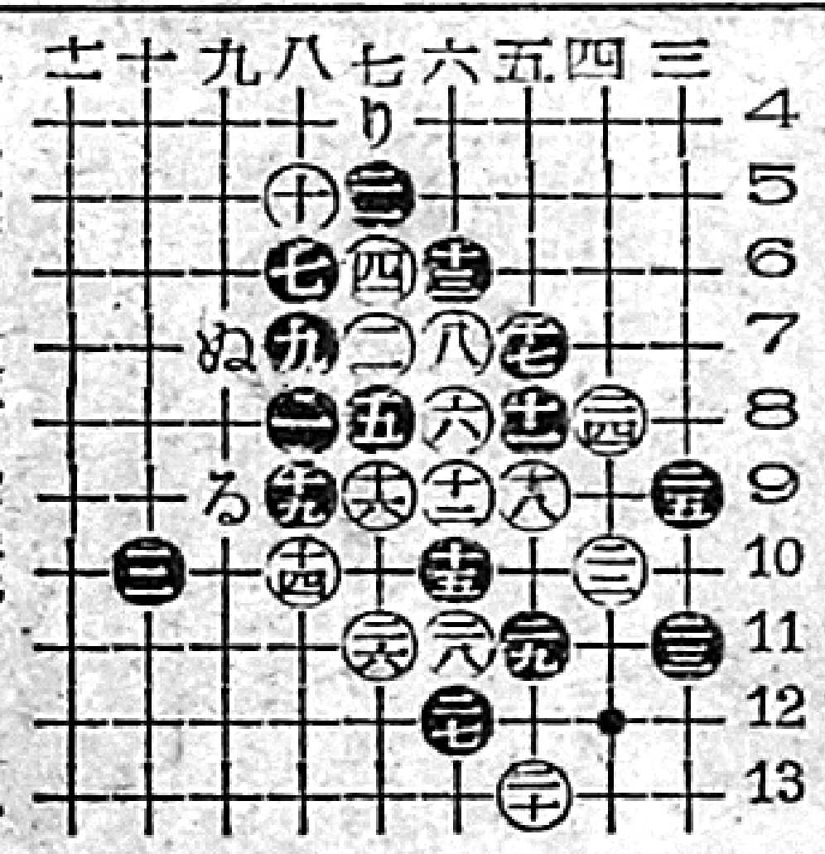
選拔聯珠戰

五六七段

【第一局】

七段 深井一砥

【先】五段 山崎勝堂



（白廿四より黑廿九まで）

（五）

觀戰評

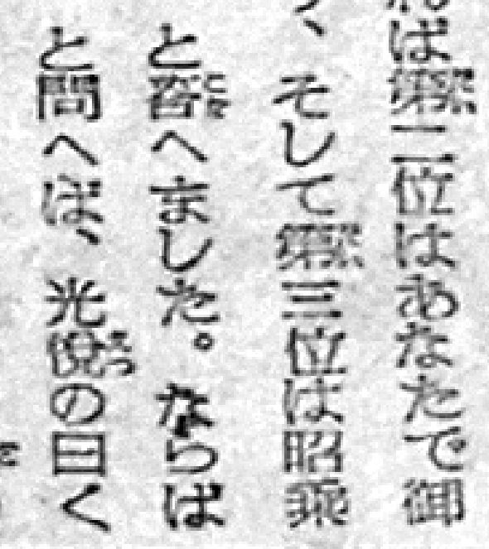
名人 高木樂山

白十六は、かく引きたい處でもあるが、この際氣を緩へて上辺に轉じ（り）に打つて（ぬ）の点と（十七）の点の「三々禁絕」を狙つて見たかつた。

山崎五段は、黑十七と、十九の反対どめを考へて苦しんだ…と戰後の感想で述べられたが、黑十七を反対は白（り）に打ち、また十九の反対は白（る、二六）の順に引き進んで後手勝だつた。

白廿は、深井七段らしき輕妙さがある。（二五）の点の「三々」を狙つてゐるのだ。が、これは（二六）に打つ方が凄味もあつた。

黑廿一、これはボンヤリと（二六）に打つて置きたかつた。



戰友記

尾崎士郞

吉田貫三郞畫

【16】

月夜（四）

「さうだなア、――ゲリラといふのは？」

といつたまゝ、赤樫小助は當惑したやうな苦笑ひをうかべた。「いろいろに變裝して、味方の軍隊の隙のあるところからもぐりこんできては、卑怯な妨害をする戰法なんだよ、眞正面からぶつかつてきたんではとても敵はないからそんなことを考へだしたんだ」

「ぢやあ、ゲリラといふのは卑怯者のことなのね？」

赤樫小助は、聞えないやうな振りをして、生返事をしながら蒲團の中へごろりと橫になつた。その次の朝である。だしぬけに表の格子戶があいて、近所に住んでゐる新聞記者の長久手が、案內も乞はずせかせかと入つてきた。

「おい、いよいよ形勢は急迫してきたぞ。――昨夜は社から出征する男の壯行會があつてね。月を眺めながら一杯やつてゐるうちに、去年、北支へ從軍したときのことをおもひだしたよ」

長久手とはじめて會つたのは二年前、武漢從軍のかへりに、揚子江をわたる船の中であつたが、その次の年、赤樫が北支から蒙疆の戰線視察にいつたとき、長久手は特派員として北京に滯在してゐた。

「おれも、つくづく戰場へ行きたくなつたよ、――寸の詰つた內地の生活はまるで息が切れさうだ」

「いやおれも、今、眼をさまして戰場のことを思ひだしてゐたところだが、この二三日對外情勢が非常に險惡になつてゐるらしいな、どうだい、日米交涉は？」

「それよりも前にソ滿國境に危機が迫つてゐるよ」

「ところで、君」

と、赤樫が蒲團の上へどつしりと胡坐をかいた。「ゲリラ戰術といふのは、一体どういふ戰術なのかい、――昨夜は子供に質問されて、實は返事に窮してゐるところなんだが」

「ゲリラといふのは、君」

長久手は面喰つたうに眉をぴりつと動かした。「いや、さう言はれると實はおれもよく知らないんだが、知らないで、長いあひだ使ひ古してゐるんだから妙なもんだな。おれの記憶では、たしかにゲリラといふ名前の將軍がゐたと思ふんだが」

二人の會話は、たちまち、空の一角からひびいてきた飛行機の音によつてうち消された。

藝能

產業戰士慰安浪曲

十七、八の二日間名古屋市公會堂に開演、出演者は伯猿、小柳丸、三樂、〆友、重行、虎丸らである

【映畫けふ番組】名古屋名寶◇中劇、大寶、常盤、千歲、新劇、名寶、松竹、港「加藤隼戰鬪隊」「映◇京映、納屋橋、大須、帝國「五狗倒し」◇名劇、日ノ出、豊富、世界「あの旗を擊て」